

〈日本人〉の境界

沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮

植民地支配から復帰運動まで

● 小熊英二著

こういう精細、緻密な研究を何と賞揚したらいいのか？。おそらくは膨大な資料を読みこんでの希有な確証の探究とでもいえるのだろうか、しかも境界という視点が、読むひとにグサリと刺さる。だれが、どこまでの範囲の日本人だったのか。誰がいつ、なぜ、その範囲を設けたのか。その境界と近代日本の関係から、日本と日本人の像を、もう一度あきらかにしようと、最初の頁に書かれている明晰。ナワバリとモウケとメンツに、国家も個人と同じように生きているに違いないと思う、タダのヒトにとっては、とても勇気づけられる貴重な研究書である。

植民地政策の再検討にとどまらない。日本人が自分の存在理由とする、ナワバリの意識、そのゆらぎ、変化、強化、拡張のありようを、有無を言わさぬ証拠で、緻密に立証する。さまざまの願い・欲求・神話・計算・失望・苦悩・悲劇のあかしによっても、我々日本人のよってきたるものを抉り出す。(A5判・

七七八頁・五八〇〇円・新曜社)